

もので、もちろん溺愛とはまた別のことだ。

震災などの際、動物保護団体が現場に取り残された犬や猫を救済する活動がニュースになるのは、こうした概念が普及している証左とも言えるだろう。ひと昔前なら「人の命さえ危ないときに犬猫の保護なんぞに構ってられるか」となっているところだ。

ペットから人生の伴侶へ出世(？)したそんな犬猫を現代の歌人はどう見つめているのだろう。

・何もせず嗅ぎに来てから立ち去ることを猫のモモおぼえたり

高瀬一誌『火ダルマ』

・ま夜中に物食ふ犬の歯牙の音いさぎよき

もの覚めて聞きをり 安永落子『褐色界』

・若き日は猫にもありてあたへたる木天蓼のこなにわれをうしなふ

小池光『現代短歌』2014年9月号

「観察眼」の歌としてくくってみた。一首目、猫の仕草をまるで人の子のようにしつかりと観察している。二首目、深夜に聞こえて来た犬の物食う歯音をいっそいさぎよいと感じたのだろう。

三首目はマタタビに夢中な猫への目。「猫にも」としたことで、人にもこういう時代

はあるよなあという感慨を含ませてより味わい深い歌となった。

・春幹に爪とぐ猫を笑ひ合へばこちらを見たりまじまじと見る

花山多佳子『春疾風』

・庭隅のペットの墓に陽の当り猫が来犬が来て座りをり 富小路禎子『幻の花』

これらも観察の歌だ。爪を研がないことには伸び続けて支障が出てしまう猫にしてみれば「爪研ぎの何がそんなにおかしいの？」と真面目に怒っているのだろう。二

首目はどこかウソっぽいけれども事実だ。まるでしんみりした短編映画を観ているような気分になる。

・地を這ふ夢の中をひたせり真夜中にみつ

飲む猫の舌ならず音

尾崎まゆみ『明媚な闇』

・やはらかく畳のへりを踏んでゆく猫の足音のなかに覚めたり 大辻隆弘『夏空彦』

・夜のふけに犬は鎖の音ひきて眠りのかたち選びあひらし 尾崎左永子『夕霧峠』

・昼寝するわが上にきて仔猫ありそのほどほどの体重ぞよき

浜田康敬『家族の肖像』

・少年はわが少年の留守にきて帰りぬ犬と

しばらく話し 中野昭子『夏桜』

日常の暮らしに溶け込んでいる犬猫たち。一、二首目、猫のたてる舌や足の音と睡眠

はどうも歌と相性がいいようだ。三首目は犬の動きによって音を立てる鎖からの寝床での想像。四首目、生き物と接すると人は心が落ち着くというセラピー効果そのままの歌だ。五首目、目当ての友だちがいなくて所在なく犬と話している少年の姿が見えるようだ。

・猫の舌いく枚のびて来たりけり午睡の夢のうたた寝の中 内藤明『海界の雲』

・永遠に不平屋としておれはゐる 濡れし鼻面を寄せる巨犬

岡井隆『神の仕事場』

・雨降りの仔犬のやうな人が好き、なのに男はなぜ勝ちたがる

栗木京子『夏のうしろ』

・花の奥にさらに花在りわたくしの奥にわれ無く白犬棲むを

水原紫苑『あかるたへ』

・イヌつけてプナもサクラムもサンセウもやや劣る意とするあからさま

今野寿美『雪占』

「喻や抽象としての犬猫」でまとめてみ